

国語研の窓 第26号 (2006年1月1日発行)

雑誌名	国語研の窓
巻	26
ページ	1-8
発行年	2006-01-01
URL	http://doi.org/10.15084/00001935

国語研の窓

26号

平成18年1月1日 第26号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2

電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334

URL <http://www.kokken.go.jp/>



雪の中庭

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：
 - 日本語教師の継続的・段階的な成長を目指して 2
- 第27回「ことば」フォーラム報告 4
- 第28回「ことば」フォーラム報告 5
- 刊行物案内 6
- 新刊案内 6
- ことばQ&A 7
- お知らせ：「ことば」フォーラム、国際シンポジウム 8

暮らしに 生きる ことば

「きしよい」って何ですか？

「「きしよい」って何ですか？」これは海外で日本語を教えているある教師が学習者から受けた質問です。「きしよい」とは「気色悪い」という意味の最近の若者言葉ですが、当の教師もそのときが初耳だったそうです。教科書にも出ていないし、今までに教えたこともない言葉だったので、どこで聞いたのか逆に学習者に質問したところ、インターネット上やチャットの会話で見るということでした。教師の知らないところで、学習者が教師も知らない生の日本語に触れ、しかもそれを学習しているという現実に驚いたそうです。

国内外を問わず、日本語を学ぶ学習者が増え、海外では230万人を超えています（国際交流基金、2005）。国立国語研究所が、そのような海外の日本語学習者（タイ、韓国、台湾、マレーシア）を対象に、「日本語の授業以外の日常生活で、日本語を見たり聞いたりしたことがあるか」とたずねたところ、70～80%の人が「ある」と回答しました。具体的に

は、テレビ、アニメ、マンガ、ビデオ、インターネットなどを通じた日本語との接触が多く挙げられていました。

一昔前までは、例えば英語の学習と言えば、紙と鉛筆を使って辞書や教科書で学ぶ時代でした。しかし、今ではテレビやビデオ、インターネットなどを利用した学習、そして語学留学も自由にできるようになりました。それは日本語学習においても同様で、海外にいながらにして生きた日本語に触れたり、実際に日本語でやりとりをしたりすることもできます。交通や情報通信技術の発達により、言葉を学ぶ環境自体が大きく変化したと言えます。

このようにして、流行語、若者言葉、カタカナ語など、日々変化し、私たちが今まさに使っている日本語が、様々な媒体を通してそのまま海外に流出し、「日本語」として認識されています。教室で学ぶ教科書の日本語ではなく、今現実に使われている生きた言葉は、学習者にとってもやはり魅力的です。このように学習者が自由に接触し学習している日本語は、私たちの使っている日本語の今を映し出していると言えるのかもしれません。（小河原 義朗）

日本語教師の継続的・段階的な成長を目指して

—— 日本語教育長期研修 ——

●現職日本語教師の成長を支援する

現在、約3万人の日本語教師が日本国内で活躍しています。彼らの多くは、大学や民間日本語教育機関の養成課程などで日本語教師になるための勉強をし、日本語を教える仕事を始めています。

しかし、養成課程を修了しただけで、日本語教師として十分な働きができるようになるわけではありません。養成課程を修了し、教師として採用されたということは、教師として一人前となったということではなく、あくまでも教師としての人生の入り口に立ったにすぎません。

小学校や中学校で働く教師には、学校の内外に様々な研修の場が用意されています。しかし、日本語教師の場合、現職教師向けの研修は、学校外においては単発的なものが多く、長期にわたるもの、教師としての成長段階に応じたものはほとんどありません。また、組織の中での研修については、その実態は明らかになっていません。教師として成長する機会というのは、日本語教育の世界ではいまだ整備されていない状況であり、その結果、日本語教育全体の発展を足踏みさせていると言えるでしょう。

こういった現状を改善するべく、教師としての資質・能力を高めたいという方々に研修の場を提供し、同時に、現職教師が身に付けるべき資質・能力は何か、それらを伸ばすにはどうしたらよいのかを実践的に研究するため、国語研究所では現職日本語教師向けの研修を行っています。複数ある研修のうち、ここでは、現職教師の継続的・段階的な成長を支援するために実施する「日本語教育長期研修」を紹介します。この研修には、「日本語教育上級研修」と「日本語教育研究プロジェクトコース」があり、それぞれ約10か月の間、様々な背景を持つ教師が、現場を離れることなく、研修に参加しています。

●日本語教育上級研修

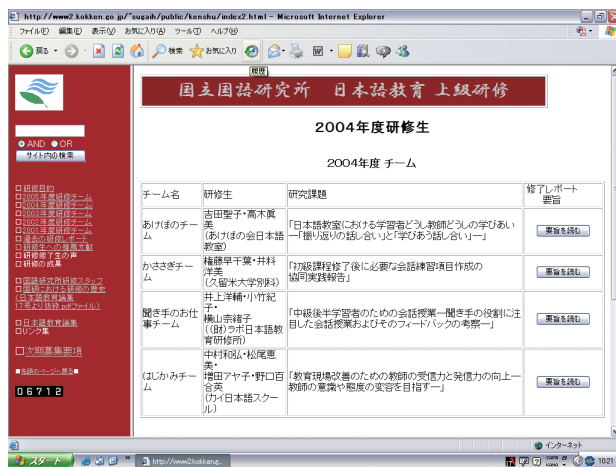
日本語教育上級研修は、「教育内容の改善・教育環境の整備のための方法」というテーマの下、各自の現場における実践や研究から見いだした具体的な課題を追求するものです。

「研修」というと、高名な指導者や研究者の講義を参加者が拝聴するというものや、一定の決められ

たメニューを全員が同時にこなしていくものなどを想像する方も多いでしょう。しかし、この研修の参加者は、各自が見いだした現場の課題を解決すべく、研修スタッフの支援を受けながら、会合や勉強会を催し、その合間に各自の作業を進めます。また、対面での会合だけでなく、メールも用いて、研修参加者同士が互いに意見を戦わせ、情報のやりとりもしながら、主体的に自身のテーマを追求していきます。



参加者がこれまで取り組んできたテーマは、外国人児童生徒に対する指導の内容と方法、語彙や漢字、会話の教材開発、自律的学習を促す活動など、多岐にわたります。これらはいずれも、多様化し、拡大した現在の日本語教育が抱える課題だと言えます。これまでに取り組まれたテーマは、上級研修のWebサイト <http://www.kokken.go.jp/johken/> で御覧いただくことができます。



この研修には、日本語学校や大学だけではなく、小・中学校、企業、地域の日本語教室など、様々な現場で日本語教育に携わっている教師が参加してい

ます。関東近県だけでなく、鹿児島や福岡、山形、大阪など、遠方からの参加希望者が絶えないため、現在は、インターネットによるテレビ会議システムも活用して、会合を行っています。

●日本語教育研究プロジェクトコース

国語研が実施する日本語及び日本語教育にかかわる研究と密接なつながりを持たせながら進めているのが、「日本語教育研究プロジェクトコース」です。このコースで、研修参加者は国語研の研究成果を学びながら、それを自身が抱える現場の課題に結び付け、各自の研究テーマを設定します。そして、今まさに国語研で進行中の研究を部分的あるいは間接的に経験することによって、研究の進め方や研究手法を身に付けていきます。また、課題を探究する過程では、研修を担当するスタッフだけでなく、異なる現場から集まった研修仲間とともに情報交換・意見交換をします。この活動は、具体的な問題解決法や研究手法の獲得にとどまらず、自身の実践の再検討を促し、教育改善への新たな視点、教育を社会的文脈の中で見つめる広い視野の獲得へと導いていきます。



先に紹介した「上級研修」では教師が個別の課題を持ち寄るところから研修が進められるのに対し、本コースでは、国語研が実施する研究から生まれた特定の研修テーマの下に、様々な立場の教師が集います。しかし、現職教師が自身の現場の課題に取り組むという点は、二つのコースに共通しています。これは、現場で抱える問題というものが、教師の成長を促す大きな原動力となるからです。そして、自己の教育活動を探究し、研究する力を身に付けるには、現場の視点を失わずに現場に根ざした研究活動を行うことが必須であるからです。

平成13年度から平成17年度まで、括弧に示した国語研の研究課題と関連を持たせて、次のような研修テーマを設定してきました。

- ・日本語教育の環境とリソース利用に関する調査研究（「日本語教育における学習環境と学習手段に関する調査研究」）
- ・日本語作文の評価と、それに基づく指導法の開発に関する調査研究（「日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究」）
- ・中国語母語話者向け日本語教育教材の作成（同上）
- ・教師の資質能力向上を目指した共同体の創造—教師教育における内容と方法—（「日本語教育の教師教育の内容と方法に関する調査研究」）

これまでのコースでは、国語研の研究に対する理解を深めながら、研究課題の絞り方や研究手法を学んだり、外部の講師を呼んで、幅広く調査法を学んだり、また、自身の研究計画の紹介や進捗状況の報告をしたり、といった活動を行っています。そして、最後に発表会やレポート集の作成をし、成果を広く伝え、それをもとに新たなネットワーク作りを行うということで、コースを締めくくります。

個々の教師の成長に加え、本コースが果たす社会的な役割として、国語研が実施する先駆的な研究が、研修参加者によって今後の教育改善に直接的に結び付けられ、生かされることが挙げられます。プロジェクトコースは、国語研の研究が、現場に資するものであること、現場の課題に結びつくものであること、を現場の教師にじかに知ってもらう機会にもなっています。

●今後に向けて

国語研は、昭和52年に日本語教育長期専門研修を開始して以来、数多くの日本語教師を育成してきました。そして、修了生の多くが国内外の日本語教育におけるリーダー的な存在となっています。これは、1年足らずの短い期間であっても、国語研の研究成果に触れること、教育実践をし、振り返ること、研究を自ら経験すること、協働作業を行うこと、日本語教育を取り巻く社会を視野に入れることなどが重視されてきた結果です。また、時代の変化に伴って、研修の内容と同時にその方法においても、常に検討が繰り返され新たな手法が取り入れられてきました。

国語研の研究が日本語教育の現場の期待にこたえるものであること、またその成果を十分に生かす形で日本語教師の育成にかかわっていくこと、そしてその教師教育の在り方も、時代や社会の要請にかなうものであることを、これからも、目指していきたいと考えています。

（金田 智子・福永 由佳）

第27回「伝え合いの言葉——コミュニケーションの意味——」

今年度3回目の「ことば」フォーラムが、北海道大学留学生センター（以下、北大留学生センター）との共催で、9月18日（日）午後、同大学学術交流会館・講堂で開催され、参加者は約130名でした。

当日は以下の3件の発表・発題がありました。

1 言葉で人とかわり合う

熊谷智子が、『新「ことば」シリーズ18「伝え合いの言葉』（国立国語研究所編集）の内容を踏まえながら、「言葉による人へのはたらきかけ」「目的を果たすこと、関係を保つこと」「集団づくりの言葉」「多様性とコミュニケーション」など、言葉で人とかわり合うことの意味について言及しました。そして豊かな「伝え合いの言葉」のやりとりに向けて、「想像力」と「柔軟性」が重要であると指摘しました。

2 伝え合うということ——留学生の場合——

柳町智治氏（北大留学生センター）が、北大の留学生に対する日本語教育の現状を踏まえながら、センターの教室内での留学生の言語活動を「ウチ」、センターを出た後のそれを「ソト」と位置付け、「ウチ」「ソト」の環境の違い、必要な語彙、会話の違い等に焦点を当てながら、今後期待される留学生教育の在り方にも触れました。「ウチ」では主に「知識」があるかないかが重要だが、「ソト」では、モノ、非言語要素、空間・場面などが絡み合った要素に配慮しながら、いかにしてコミュニティの有能な一員であることを示せるかが重要であると指摘しました。

3 違いを知る、違いをたのしむ

——言葉を通して関係性をつむぐために——

岡本能里子氏（東京国際大学）が、21世紀を生き

ぬくための日本語表現能力、伝え合う力とコミュニケーション能力、現在日本社会のコミュニケーション事情、日本社会の異文化性等に焦点を当てて、コミュニケーション上の問題点に言及しました。また、ことばの力を育む実践事例から、「個人として」かわることや、キレずに、攻撃せずに、自己主張をすることの重要性について触れました。そして、違いを知る・楽しむこと、摩擦やせめぎ合いを通して他者の「声」の存在を受容しつつ自己の「声」をもつこと、さらには、文化の「間」に立つ心の余裕と想像力・創造力を持つことが重要であると指摘しました。

フォーラムの後半では、まず、会場からの質疑に対して発表者から応答が行われました。次に小林ミナ氏（北大留学生センター）が日本語教育の立場からコメントしました。そこでは、日本人母語話者と非母語話者（外国人）との違いについて触れながら、母語話者のコミュニケーション能力はそれほど一律なのか、母語話者の日本語はそれほど美しく豊かかという小林氏の問いかけをもとに、対話の相手の日本語（ことば）をわかろうとする「想像力」と「柔軟性」が重要であることを再確認しました。また、杉戸清樹（国語研究所長）からは、ひょっとしたら理解できないかもしれない、伝わっていないかもしれないと思うことの重要性、あきらめず、くじけずに（柔軟に、キレずに余裕を持って）、コミュニティの一員として「分かって、伝えよう」と努力することの肝要性について指摘がありました。その後、会場の皆さんとのやりとりも活発に行われ、改めて、伝え合いのためには「一歩立ち止まること」が重要であることが確認されました。（野山 広）



第28回「外来語の過去・現在・未来」

第28回「ことば」フォーラムは、「外来語の過去・現在・未来」と題して、11月5日（土）13時30分から16時まで、名古屋国際センター・別棟ホールにて開催されました。当日は晴天に恵まれ、参加者は150名を数えました。

今回のフォーラムでは、作家の清水義範氏、名古屋外国語大学長の水谷修氏をゲストに迎え、国語研究所長の杉戸清樹を加えた3人で、講演と全体討議を行いました。3人とも名古屋市内の出身ということで、とても和やかな会になりました。



最初に、3件の講演がありました。

- (1) 杉戸清樹は、「暮らしの中の外来語—その〈光〉と〈陰〉—」と題し、外来語が持つ〈光〉と〈陰〉の側面について述べました。〈光〉の側面として「暮らしのための言葉が豊かに充実する可能性が広がる」という点を、一方、〈陰〉の側面として「言葉の伝え合いを妨げる恐れをいつも持っている」という点を挙げました。その上で、古代から現在まで日本語を育ててきた先人の努力を受け継ぎ、将来の日本語につなげたい、そのために言葉に対して常に自覚的でありたい、と語りました。
- (2) 清水義範氏は、「小説の中の外来語」と題して、明治から現代までの小説で外来語がどのように使われてきたかを取り上げました。具体的に19編の小説を挙げ、そこで使われている外来語の特徴やそれらが文体に与える影響などを個別に解説しました。そして、時代とともに移り変わっていく外来語はその時代性を描くのに一役買っていること、だからこそ、その当時は外来語の部分が新鮮に見える、時代が経つとそれが古びて見えていくことを

指摘しました。

- (3) 水谷修氏は、「外来語をとりかこむもの—外来人、外来もの、外来文化を考える—」と題し、古来、日本人が「外来」という問題とどう接してきたかについて述べました。遣唐留学生「井真成」の墓誌を例に、8世紀頃の外来語問題について説明し、またタイ米が流入したときの騒動を例として、外国のものを日本の社会に取り入れる際の問題点を指摘しました。その上で、自分の持っている言葉をどれだけ大切にできるか、どれだけ意識化して活用する能力を身につけているのかが現在問われているのではないかと問いかけました。

休憩時間には、パネルによる国語研究所「外来語言い換え提案」の紹介や、刊行物の展示などが行われ、来場された方々が研究員と活発にやり取りされる場面が多く見られました。



休憩後の後半には、参加された方々からの質問に講演者が答える質疑応答の時間がありました。会場からは数多くの質問が寄せられ、外来語に対する関心の高さを改めてうかがわせました。最後に、「外来語の未来」と題した全体討議を行いました。未来に向けて、私たちは外来語とどう向き合っていくべきかについて、講演者の間で意見を交わしました。そして、外来語のみならず、日常生活の中で、言葉を意識的・自覚的に使っていくことの重要性を再確認しました。

なお、今回の「ことば」フォーラムは、文部科学省「平成17年度教育・文化週間」の一環として行われました。

（丸山 岳彦）

近日完成！『方言文法全国地図』全6巻

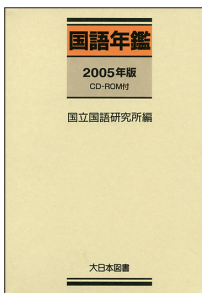
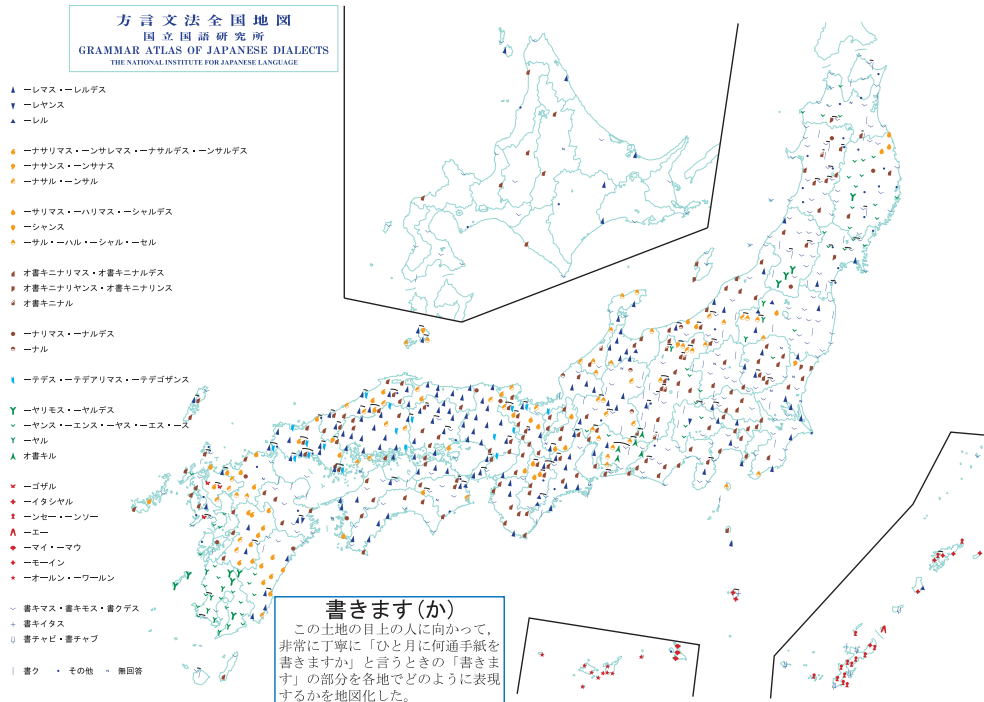
『方言文法全国地図』の最終巻第6集が、まもなく刊行されます。これをもって、全巻が完成します。

第6集「表現法編Ⅲ」は、待遇表現（敬語）をおもな対象とした80枚の地図を収録します。

日本全国の敬語を扱った等質な資料が公表される

のは、これからはじめてです。下の図は、中の1枚を略図にしたものです。敬語にも様々な方言上の違いがあることが分かります。実際の地図では、もっと詳しく各地の語形を見ることができます。どうぞ、お楽しみに。

(大西 拓一郎)



『国語年鑑2005年版』

昭和29年の創刊以来半世紀にわたって、日本語の研究情報に関する基礎的な文献として重用されてきた『国語年鑑』の2005年版を、このほど刊行しました。

- 第1部「動向」**…第2部を資料とした文献の動向、及び本研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を資料とした社会における動向について、分析を行いました。
- 第2部「文献」**…2004年中に発表されたものを中心として、日本語に関する図書や、雑誌に掲載された文献、そして日本語に関する内容を含んだ総合雑誌（月刊誌）の特集・連載・対談を、それぞれ目録の形で一覧できるようにまとめました。図書と雑誌文献については、利用しやすいようにしています。加えて、図書・雑誌・総合雑誌の発行所のデータも掲載しました。

- 第3部「名簿」**…日本語にかかわりの深い個人や学会・団体等の情報を掲載しています。
- 付録 CD-ROM**…第2部のうち「刊行図書」「雑誌文献」のデータを、PDF ファイルとテキストファイルの2種類の形式で収めました。

* 御購入に関するお問い合わせ先：大日本図書（電話03-3561-8679）

*『国語年鑑』のホームページ： <http://www.kokken.go.jp/katsudo/kanko/nenkan.html>

新刊

- 1 『国語年鑑2005年版』 2005年11月／大日本図書／冊子（A5判横組み553ページ）、CD-ROM／税込8,085円
2 『日本語科学18』 2005年10月／国書刊行会／B5判横組み140ページ／税込3,150円

ことばQ&A

※この欄は、当研究所に実際に寄せられた「ことば」に関する質問にもとづいています。



質問 最近、しばしば使われ見聞きする「セレブ」とは何ですか。こういう新しい外来語をどう考えたらよいですか。



回答 「セレブ (celeb)」は著名人という意味の英語「セレブリティ (celebrity)」の省略形です。英語の辞書に、どちらも見出しとしてたてられています。

日本語では、「あの人はセレブなのに地下鉄に乗る。」「セレブ婚」「セレブな店」「セレブっぽい服」などと使われています。ここでは「有名人」という、もとの意味から発展して「成功者」「裕福な人」あるいは文脈によっては「芸能人」を意味したりしています。さらに、そういう人たちが身につけたり買ったりする「一流 (品)」のことを指したり、その特徴である、「高級そうな」「高額そうな」といった日本語独特の解釈でしか理解できないような使い方さえも見受けられます。

外来語のような目新しい言葉や言い方が広まるのは、それまでに同じことを指す言葉がなかった、言い換えれば、今までの言葉では賄いきれないので、新しいものに飛びついたり、便利な言い方を取りいれたりする、というひとつの言語現象ともいえます。

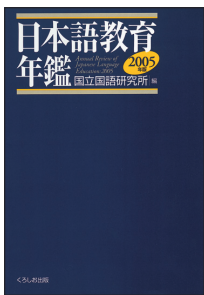
言葉の意味・用法というのは、似ていても少し違うとか、あるいは同じ意味でも語種（この場合日本

語と外来語）が違ふとか、表記する文字種が違ふなどすると、それはそれで別の意味や効果をもちます。まったく相似の別語は無く、いわば“似て非なるもの”を無限に使い分けるのです。しかもそれは意識・無意識を問わないことです。

さて「セレブ」をみずから使う人にはなんら抵抗も違和感もないでしょうが、活字や音声で溢れてくるカタカナ語の一つとして、受けとるばかりの人もいます。目障りで聞きなれない印象や、最近とみに頻繁に使われると意識すると、何だこれは、という気持ちや、とりあえず合わせておこう、と見過ごす、あるいはいつしか自分も使ってしまう、という雪崩のような言語現象が進んでいるかもしれません。

「セレブ」とは便利な言葉だ、とするか、「セレブ」なんて決して使わない、と考えるかは、人それぞれです。もっとも、日常の言語生活では、まったくそういうことは考えないでいる人も多いでしょう。

国立国語研究所の外来語言い換え提案で扱っているのは、広報や白書で用いている専門用語で、わかりにくい外来語についてです。「セレブ」のように一般に急速に広まってしまった語については、今後も観察をかさねる必要があるでしょう。五十年後百年後にこの言葉がどうなっているか。評価はその命脈に委ねるべきものと考えます。（山田 貞雄）



『日本語教育年鑑2005年版』

『日本語教育年鑑』は、国内外の日本語教育の現況や日本語教育研究の動向についての情報を掲載しています。

○第1章 特集「書くということの意義」

国内の地域社会にもさまざまな背景を持った外国籍住民が増え、読み書きも含めた総合的な日本語学習への支援が必要となってきています。また、大学等では、書くことの技術的側面や評価基準の在り方について検討されるようになりました。ここでは、書くということはどういうことなのかという根本的な問題と、文章表現を指導する上での留意点や評価の在り方を取り上げています。

○第2章 日本語教育の動向

日本語教育関係機関・団体からの2004年度の活動報告を掲載しています。

○第3章 日本語教育関係機関、助成研究課題

関連学会・教師会、助成財団等のリスト、関連領域の文部科学省科学研究費補助金採択課題等を掲載しました。

○第4章 日本語教育文献

2003年4月から2004年3月までに発行された日本語教育関係の図書、論文のリストを掲載しています。

国立国語研究所日本語教育部門では、各種日本語教育関連文献（報告書など）のほか、地域日本語教室で作成された教材等を収集しています。これらを作成された際には、日本語教育部門資料室担当あて御寄贈いただけると幸いです。

第29回「ことば」フォーラム「コミュニケーションとは何か ― 伝え合いの意味 ―」

『新「ことば」シリーズ18「伝え合いの言葉」』（国立国語研究所編集）の内容等を踏まえながら、コミュニケーションの意味について多角的に考えます。

日 時：2006年2月18日（土）

午後1時30分（1時開場）～4時30分

場 所：国立国語研究所講堂

【テーマ】コミュニケーションとは何か ― 伝え合いの意味 ―

パネル・講師

熊谷智子（国立国語研究所）

小池 保（尚美学園大学、元NHKアナウンサー・解説委員）

清 ルミ（常葉学園大学）

箕口雅博（立教大学）

杉戸清樹（国立国語研究所長）



- ・手話通訳があります。
- ・入場は無料です。参加の申し込みをしてください。

【申し込み方法】 氏名・連絡先・参加希望人数を下記まで御連絡ください。

国立国語研究所「ことば」フォーラム係

TEL：042-540-4300(代) FAX：042-540-4456 E-mail：forum@kokken.go.jp

詳しくは、国立国語研究所のホームページ (<http://www.kokken.go.jp>)、ポスター、ちらしを御覧ください。

国際シンポジウム「言語コーパス ― 構築と利用 ―」のお知らせ

言語研究用コーパスの構築状況と利用状況について、韓国、中国、台湾、イタリア、英国の研究者に報告していただきます。また国立国語研究所が2006年度より構築を開始する予定の日本語の大規模な書き言葉コーパスについて、その概要を発表します。

■日 時：2006年3月6日（月）、7日（火）

■場 所：時事通信ホール

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8

■講演予定者

キム・ハンセム（韓国国立国語院）

ソ・サンギョ（韓国延世大学）

詹 衛東（北京大学）

Marco Baroni（ボローニャ大学）

Stephen Bullon（ピアソン・エデュケーション）

黄 居仁（台湾中央研究院）

山崎 誠（国立国語研究所）

前川喜久雄（国立国語研究所）



- ・同時通訳あり（使用言語は英語と日本語）
- ・参加無料。申し込みが必要となります。
- ・申し込み方法については、近日中に国立国語研究所のホームページにてお知らせします。